新刊紹介

西田谷洋編『女性の語り／語られる女性　日本近現代文学と小川洋子』

牧　千夏

本書は、編者と編者の教え子とによる論文集である。女性作家による現代文学作品を主な分析対象とし、物語分析を分析手法とする。

前半の論考は、女性の主体性と女性の語りという二つのテーマに分けられる。前者のテーマでは、上野未貴論が、川上弘美『センセイの鞄』で、受動性を装いつつ物語生成の主導権を握る女性主人公の戦略を分析した。高木佐和子論は、田村俊子「枸杞の実の誘惑」に描かれる少女の性の目覚めが受動的であることを、現代的な観点から分析した。髙田雅子論は、江國香織「藤島さんが来る日」で、女性主人公がジェンダー秩序に反抗するものの、自ら男性の消費に供するあり様を分析した。山道貴代論は、江國香織「ねぎを刻む」に「生き方に対する誇り」を読み取る先行研究を批判し、孤独に対する諦めの態度を読みとった。

後者の女性の語りのテーマでは、西田谷洋論が、村上春樹の女語り小説から男性優位のまなざしを見出した。そして、男女に代表される二分法的な枠組みを越境しつつ、その枠組みを総体として受け入れることが、生の多様なあり方を可能にさせると示唆した。舟橋恵美論は、立原えりか「アイスキャンデー売り」の、戦争の非体験者が戦争を語る構造に着目し、語り手の暴力性を指摘しつつ、代行の可能性に言及した。

前半の各論で見出されるのは、女性をめぐる複雑な社会のあり方とそれに関係する女性の姿である。精緻な物語分析によって、女性のあり方を能動／受動のどちらかに回収できないことがあきらかにされ、西田谷論で、二分法的な分析枠組みに対する批判と展望とが示された。

後半は、教科書教材の小川洋子作品を分析したショートエッセイ集である。高木佐和子と西田谷洋とが執筆した九論で構成される。いくつか抜粋して紹介したい。

高木は、はじめに小川洋子の研究史を簡潔にまとめ、教科書教材の書誌や共通するモチーフを整理した。小川洋子研究における本書の位置と、後半の論の見取り図とを示してくれる。高

木はさらに「飛行機で眠るのは難しい」で、指導書が生の危機からの帰還を読み取ったのに対し、小説の入れ子構造に着目することで虚構の効用を示す物語として解釈した。「リンデンバウム通りの双子」は、男性心理を描いた数少ない小川洋子作品として取り上げられた。主人公の小説家とその翻訳者との良好な交流を、主人公と娘との交流が修復するメタファーと捉えた。

他方、西田谷洋は、「果汁」で、指導書が父親との不和に悩む「彼女」への「僕」の思いやりを読み取ったのに対し、「僕」が「彼女」とその後接触せず二〇年後にこの物語を語ることから、「彼女」をおぞましきものとして周縁化したと読んだ。「博士の愛した数式」では、指導書が疑似家族のあたたかな関係を読みとったのに対し、博士のあり方に着目することで、博士の数学愛を長期記憶の喪失による不安定感から安定を得る材料として解釈した。「巨人の接待」では、小説家の「巨人」が親密圏に自閉する様が分析され、「巨人」の小説の翻訳者である「私」は、自閉する「巨人」を翻訳行為によってグローバル出版資本主義に接続すると指摘した。

小川洋子の教材作品は、先行研究のほとんどが指導書であるため、道徳的・指導的解釈になりがちである。高木・西田谷両論ではそれを批判的に検討し、人間関係の亀裂や代行の暴力性を丁寧に取り出した。

西田谷はあとがきで、新自由主義に対抗するために「共約され得ない多様な価値観を吸収し公的性格を付与することで、社会の価値観を単一化されることを防ぐ」必要があるという。本書がおこなった分析スタイルは、西田谷が主張する方法に合致すると思われる。すなわち、規範化されやすい指導書を批判した各論は、分析を論集という形態で提示することで公的な性格を得られ、指導書に縛られない読解や価値観を提示することに成功すると思うのである。

（二〇一五年一二月一七日　一粒書房　八九頁　非売品）

（まき・ちなつ　名古屋大学大学院生）